つぐのひ ―Another travel―

嘆きのラジオ

【注意事項】

このＰＤＦファイルは「ハーメルン」で掲載中の作品を自動的にＰＤＦ化したものです。

小説の作者、「ハーメルン」の運営者に無断でＰＤＦファイル及び作品を引用の範囲を超える形で転載・改変・再配布・販売することを禁じます。

【あらすじ】

つぐのひ

第二章交差点のセーラーお兄ちゃん

怨みっ娘、ＰＴＡ母ちゃん

怨みっ子、四季子さんｗｉｔｈ死季子さん

オリジナル主人公強い娘ちゃん

東京喰種、裏主人公リオ

ｄｂｄ、山岡凛ｗｉｔｈ貞子

ｄｂｄ、シェイプｗｉｔｈちび三角頭

が主人公を勤める物語

目次

プロローグ ―――― 1
きさらぎ駅① ―――― 6

プロローグ

怪奇現象、、
それは現代科学で証明できない原因不明の超常現象のことを言う
幽霊、妖怪、呪い、怪談
太古よりの伝統、伝説、怨みや妬み、思いの強さ
学校における七不思議などの噂
それらによって我々を恐怖、最悪死に至らしめるものだ
有名な話では怨霊や背後霊、地縛霊
河童、こなき爺、山姥
藁人形、コトリバコ、
動く人体模型や花子さん
ｅｔｃ…
世界各国で目撃承認があり、そのどれもが広く認知されている
また地方や文化、集落などのその土地独特のものもあり
ルールがその中でも確立されている

近代化に伴い、過去を知る人間がいなくなったこと、ルールを知らない部外者の干渉などにより年々被害を拡大している
世界における人間の1日の死亡件数の数パーセント、いやそれ以下かもしれない
だが原因不明の何かがいま、平和な日常へと侵食しているのだ
だがその関係は絶対的ではない、その逆も０．００１にも満たない、確率ともいえない、ほんの奇跡で起こりえる
その裏返り、
今宵はそれらが遭遇した奇怪な者達を語っていこう、世界広しと言えども彼等のような一点物は存在しないだろう
また世界には不思議なことが存在する
神隠し、異世界、
この世界の理から外れた来訪者も存在する
それが吉と出るか凶とでるかはわからない
だが奇怪なそれと異端な者達の交わりは非常に興味深い
レシピ通りの料理ではない、オリジナル、いや闇鍋のように
結果が予測不能、
当事者や現象でさえもだ

皆さんは魔法は信じるか
生物兵器は信じるか
超能力は信じるか
神の存在を信じるか
○○は信じるか
平行世界の存在を信じるか
幽霊の存在を信じるか
悪魔の存在は信じるか
宇宙人は信じるか
他者の言葉を信じられるか？
奇怪な慣習を守れるか？
約束は守れるか？
好奇心に負けないか？
よくも悪くもいきすぎたものは禍をもたらす
「好奇心は猫を殺す」
「触らぬ神に祟りなし」
ふいに浮かんだ余計なこと

その正体がしりたい、確かめたいという欲求が身を滅ぼすケースが多い
信じるもの、宗教や幽霊はこれに当てはまるだろう
過度な信仰、それも邪教となれば他にどんな影響を、与えるかわからない
儀式や黒魔術といったものはその媒体に生きる者を使うのだから
なんの躊躇いもせずにその信仰心のみでそれを行うのは狂気でしかない
幽霊などこの世に実際に存在しないと思われているものでも存在すると脳が認識することで
みえてしまうことがあるらしい
それが幻覚なのかそれとも本物なのかはわからない
だが信じすぎれば本人に必ず悪影響を与えるのは確かだろう
さてこんな長々と尺潰しをしてきましたが
そろそろ怪談に入っていきましょう

、＊これはホラーではありません

きさらぎ駅①

夜１２時
深夜のサービス残業を終えて私は帰りの電車のなか
明日の仕事のことを考え物思いに耽っていた
「はぁ、今日も疲れたな」
正直、わたしの職場はブラックだ例の感染症の最中でも
マスクつけりゃ大丈夫だろ、と平気で出勤させてくる
普通に怖い、リモートにしてくれ
と上司の顔を見るたびに思う
電車内で愚痴を溢す
思わず周囲をみるが、自身と同じような境遇なのか
居眠りをするサラリーマンやボーとスマホを眺めている大学生しかいなかった
疲労のあまり頭がボーとしている
外の景色が全くみえないのも疲労故のものだと思った
「、、ふぁ」

唐突な眠気、瞼が急激に重くなる
幸いにも1時間ほど到着に時間がある
明日のために少しでも疲労を回復したい
「えーと、タイマー、タイマー」
スマホを操作し、目覚ましアプリに時間を設定し
懐にしまっていたイヤホンを耳に差し込み
眠りについた
～ピピピ！ピピピ!!～
スマホがバイブレーションで震動するとともに
イヤホンからベターな目覚まし音が鼓膜を叩く
「ん、、」
口からもれた声
咄嗟に右腕の時計から時間を確認する
時計のはりは深夜1時をまわっていた
だが電車が停まる気配はない
それどころか外の景色が何もみえない
それとまころか本来聞こえるはずの音

伝わる感触すら感じない
あまりにも静かだった
周囲を見渡すが人の気配はない
皆、途中の駅で降りたのだろうか
「おかしいな」
時計をしきりにみていると
車内放送が車内にこだまする
それはいまの状況ではあまりにも不気味だった
「次は～次は～きさらぎ駅～」
「出口は右ザザ、、ザザ」
ノイズが放送を遮る
珍しいことではないかもしれないが、今の状況ではより不気味さを増していった
「とりあえず降りないと、、」
降りなければいない、そう感じた
スマホの地図機能で現在地が別れば、タクシーなど、両親に連絡すれば帰ることができるかもしれない
「きさらぎ駅？そんな駅、東京にあったかな？」

電車が減速するにつれ、窓に駅が映る
記憶のない駅名、長く通勤、退勤を繰り返し時には寝過ごしたこともあったがきさらぎ駅という名前は聞いたことがなかった
「電車間違えたかな？」
あり得ない話しではない、
実際その駅はあまり人がこないのか、看板は錆び、ぎ、の文字が薄れていた
「マップは、、」
「え？東京なの？」
マップアプリを開き現在地を確認する
針は東京をさしていた
何度も更新するが画面がかわることはない
「バグかな？勘弁してよ、」
「はぁー困った、これじゃ帰れないじゃん」
「両親を予防にも県在地がわからなければ迎えにくるのは難しい
だからといってこんな真夜中に放置なんて冗談じゃない
「もしもし、あ、お父さん、ちょっと寝過ごしちゃってきさらぎ駅っていうんだけど迎えにこれない！」

「え？知らない？うん、、お願い」
そんな駅は知らない、ＧＰＳで迎えにくる
父からの提案に安堵した
だが待っているにしても残念ながら私はじっとしているのが苦手なタイプだ
万が一の可能性もあるので誰かいないか確認の必要もあるだろう
「こんな時間に高校生？」
駅から数メートルほどセーラー服姿の人影がみえる
正直こんな時間に高校生がいるのも可笑しな話ではあるが、深夜に独りというこころ細さが勝っていた
「ちょっと、聞きたいことがあるんだけど、いいかな？」
そんな自分を騙すように、フランクに話かける
「ム？俺か？」
近づくほどにその輪郭があらわになる
声が聞こえた、野太く低い声、とても女性のものではない
セーラー服に身を包み、グラビアポーズをとる筋骨隆々の猛々しい漢が
そこには変態がいた
「ひぃ、、」

思わず漏れてしまった
消え入るような声、ひめい
「ム?」
それが聞こえたのか、変態はゆっくりと振り返る
「おぉ!よかった、すみませんが?ここがどこなのか教えて貰えませんか!?」
「え?え〜?」
本来だったらこんな変態がいたら間違なく逃げ、
いや警察に通報するだろう
だが先ほどの出来事からあの奇妙な男（どちらも奇妙だがまだ変質者のほうがまし）よりまともな人間
境遇は自分と同じような感じがした、一人でか細いが他にあっただろう思うが行動を共にすることにした
「はい?」
「へ、、変態、、」
わかりやすく、汗をダラダラにしながら弁解しようとバタバタと手を動かす
誰かに見られるとは思っていなかったのだろうか、明らかに驚いていた
「ち、ち、違う!これは妹の制服なんだ、」

そういう問題ではない
状況が状況だ
人間に、会えたということに喜ぶべきだろう
「変態さん、ここはどこですか？」
「変態で定着しないでくれないか?!」
「いや、正直俺もわからんのだ」
「気づいたらここにいた、きさらぎ駅というのもわからん」
流石の私も状況が状況のためこの土地について尋ねる
そもそも逃げるにしてもどこに逃げるというのか？
知らない土地、さらに深夜、遭難する可能性がある
「はい？地本民じゃないの？」
「あぁ」
「じゃあここで何してたの？」
「いやちょっとポージング、、を」
「はい？」
「いやなに、こちらも人を探してたんだ」
「残念ながら誰もいなかったが」

「まじかぁ～、明日仕事なんだけど、」
「そうか、俺も警備員という名誉ある、、ん？」
話を遮るようにエンジン音が聞こえてくる
車の音だ、
「む？こんな時間に車？」
「大丈夫よ、私がよんだの」
変質者のほうは訝しげな表情をうかべる
何か変なことをされたらかなわないので一応説明しておいた